

# 街並み景観における塀のデザイン研究 2

— 金 沢 —

黒 川 威 人

## 1. はじめに

日本の街並み景観は、急速に固有の美しさを失ってきている。それは、今次大戦の被害を免れた金沢の街といえども例外ではない。

街並みがこのように固有の美しさを失って行く原因は、しかし様々である。例えば、歴史的建造物の老朽化あるいは災害による崩壊、消滅（最近では、建造物の物理的や美的な生命の終えぬ内に、様々な理由で取りこわされる事例も多い）、逆にアルミサッシに代表される新建材類の普及とその濫用。そして土地価格の高騰に伴う緑地の減少と都市のスプロール化。さらには自動車交通のたゆまぬ増大による、道路の拡巾、新設。これに連動する街路の商業化と駐車場の増設等々、数え上げればきりの無い程、その背後には複雑な問題がひしめいている。

本研究はこうした現実を背景としながら、工業デザイン研究者としての立場から、特に一般住宅地における街並み景観を対象に、その構成要素の多くを占める「塀」（以下垣、柵等住宅の囲いの総称として使用）に焦点を絞り、そのデザインの研究によって、より美しい街並み景観の創出（あるいは再生）に手がかりを得ようとするものである。

## 2. 研究方法

### 2-1 前回までの方法とまとめ

街並み景観はその街の立地条件、即ち気候風土、地形、住民およびこれらの集積である歴史、文化によって醸成され個性を表出していると考えられる。従って地域によってその在り方も当然異なってくる。よって本研究は、金沢市を当面の対象として限定している。

第1報においては、金沢市における代表的な住宅地6ヶ所\*<sup>1</sup>と都心から住宅地に至る3本の大通り\*<sup>2</sup>を実地調査し、調査地域内の塀の全数

を記録、様式別に分類し地区毎の出現頻度を調べるなどした。又、参考のため京都市の住宅地の内、条件の類似していると思われる2ヶ所\*<sup>3</sup>を抽出し、同様の調査を行なった。以上の結果次のことが明らかとなった訳である。

（イ）金沢においてはブロック塀、石塀（含擬石）、モルタル塗塀（以下モルタル）の塀が圧倒的に多いこと。（それぞれ平均で45, 11, 16%計72%）

（ロ）生垣の場合も、当研究者が花壇式と名付けたブロック、石垣などで一定の高さを確保した形式がかなり見られること。（生垣35%）

要約すれば以上の2点であるが、特に（ロ）の花壇式生垣は、雪害を避ける意味でのブロックなどによる立上りと、その硬さを柔らげる上部の植栽の存在が、いかにも金沢の風土には合っているように思え、金沢に適した1つの典型的様式であろうとの心証を得ている。

### 2-2 新たな調査方法

本報では、大まかな現状把握に終った前回調査の後を受けて、さらに金沢市内の二ヶ所に渡って全数調査を実施、データーの精度の向上に努めると共に、当該2地域において葉書によるアンケート調査を実施した。これによって、街並みの外観には表われない、住民側の諸問題の把握に努めた。さらに、これに先立って入手した、東京の住宅地における同様の調査結果を、金沢での結果と対比することによって、金沢市における固有の問題とその特徴をさぐって見た。

以下は実施したアンケートの項目である（ハガキに印刷した原文のとおり）。

1. 貴家の囲い（道路面）の材料は？

（生垣は樹種をお願いします）

2. その施工年は？（ 年） およそ

戦前、20年以上前、10年以上前、近年。

3. 今の囲いを選んだ理由は？

防犯，経済性，耐雪，好み，近所との調和，その他（具体的に）

4. 今の囲いを気に入っていますか？

（否の方は理由をお願いします）

5. 今冬雪害はありましたか？

（あった方は，修理費約 円）

6. 貴家の敷地面積 坪又は m<sup>2</sup>

7. 貴家の建坪 坪又は m<sup>2</sup>

8. 今後の計画その他

9. 御職業

10. 年令

- ・調査地 a. 金沢市小立野4丁目  
b. 金沢市小將町
- ・調査時期 昭和56年8月（a）9月（b）
- ・配布枚数 a地100枚 b地70枚
- ・配布方法 上記10項目を葉書にレイアウト，印刷し，返信用切手を貼付の上，依頼状を付けて一軒一軒の家へ配布した。但し，公共建築，集合住宅，社宅および借家と思われるものは除外した。

### 3. 調査結果と考察

#### 3-1 全数（実地）調査結果

前回と同じ方法で分類しまとめた結果を表1表2に示す。

この二つの地区の数値は，前回調査で得られた結果とほぼ似た傾向を表わしていることに気付く。即ち，両地区ともブロック塀の頻出度が第1位であることやモルタル塀の多いことなどである。しかし共に古くからの住宅地であり，他の地区にくらべると板塀，生垣はかなり多い。特に兼六園に隣接し，かつ一部が中央風致地区の指定を受けている小將町の場合，ブロック塀は29%という，金沢の住宅地としては抜群の低率を示しているし，板塀の数の方は，逆に18%と高く，いかにも歴史都市らしいしっとりとした風情を感じさせる数値となっている。

これに対し，小立野4丁目の場合，ブロック塀の出現頻度が48%強と，やゝ金沢市の平均を上まわる数値であったのは意外であった。これは町内にかなり見られる官舎，社宅などが影響しているのかも知れない。

一方，花壇式を含む生垣の全数が約18%と市

の平均を上まわっており，このあたりでようやく天徳院という江戸時代初期からの名刹（3代藩主夫人珠姫にちなむ）を町内に擁する町としての面目を保っている。

表3は比較のため，前回調査分を合計し平均値を出したものである。なお，この表の数値は三本の大通りを割愛し，代って前回掲載しなかった長町二丁目の数値を加えて算出したものである（長町二丁目単独の表は末尾に付表として載せた）。

表1 金沢市小立野4丁目（昭和56年8月調べ）

	（件）	（%）
ブロック塀	92	48.4
石 塀	13	6.8
モルタル塀	40	21.1
生 垣	33	17.4
フェンス	4	2.1
板 塀	5	2.6
竹 垣	2	1.1
築地塀	1	0.5
合 計	190	100

表2 金沢市小將町（昭和56年9月調べ）

	（件）	（%）
ブロック塀	30	29
石 塀	8	8
モルタル塀	18	17
生 垣	7	7
フェンス	12	12
板 塀	19	18
竹 垣	4	4
築地塀	3	3
そ の 他	2	2
合 計	103	100

表3 金沢市内平均（大通りを除く6町）  
昭和54年8月～9月調べ

	（件）	（%）
ブロック塀	536	47.8
石 塀	129	11.5
モルタル塀	191	17.0
生 垣	107	9.5
フェンス	43	3.8
板 塀	57	5.1
竹 垣	11	1.0
築地塀	30	2.7
そ の 他	18	1.6
合 計	1122	100

### 3-2 アンケート調査結果

アンケートによっても、塀の種類などそれぞれ数値が得られる訳であるが、この場合は回答を寄せた人のみの集計となり、当然現実とは若干異なる。今回実地調査地区と同一の地区においてアンケート調査を実施したのは、この現実とのズレがどの程度数値となって現れるかにも興味があったからであるが、下記の一部を除けば、ほぼ実地調査と同様の値を示していることが判った。表4以下にアンケートの各項目を集計したものを示すが、表1～2と表4～5を比較すれば明らかなように、板塀や生垣等の所有者は、高い回答率を示しているし、小立野4丁目においては石塀の所有者が図抜けて高回答であった事を念頭に置く必要がある。

たゞ、回収率は小立野4丁目で51%、小将町で45.7%とこの種アンケートとしてはかなりの高率であり、上記の点を割引いて読み取るなら各項目の数値は、それなりにかなりの精度で町全体の雰囲気を表わしているものと受け取って良いであろう。

表4 囲いの材料 小立野

	(件)	(%)
ブロック塀	19	37.3
石 塀	8	15.7
モルタル塀 (含R・C)	10	19.6
生 垣	10	19.6
フェンス	4	7.8
板 塀		
竹 垣		
築地塀		
そ の 他		
合 計	51	100

表5 囲いの材料 小将町

	(件)	(%)
ブロック塀	11	35
石 塀	3	9
モルタル塀	4	13
生 垣	3	9
フェンス	2	6
板 塀	8	25
竹 垣	0	0
築地塀	0	0
そ の 他	1	3
合 計	32	100

表6 表7 施工年

	戦前	20年以上前	10年以上前	近年	不明	計
小立野						
件名	7	18	15	11	0	51
%	14	35	29	22	0	100
小将町						
件名	6	7	7	12	0	32
%	19	22	22	37	0	100

表8 今の囲いを選んだ理由 小立野

防 犯	経済性	耐 雪	好 み	近所との調和	耐久性	その他 住宅との調和	その他	不 明	計
8	9	8	19	7	2	3	6	8	70%
11.4	12.9	11.4	27.1	10	2.9	4.3	8.6	11.4	100

その他の内訳は、日当りを要素の1つとしたものが2件で、残りは、防音上、大工まかせ、単なる庭木の植え換え場所として、隣りに公園があるから、が各1件であった。

表9 今の囲いを選んだ理由 小将町

防 犯	経済性	耐 雪	好 み	近所との調和	耐久性	その他 家の体裁	その他	不 明	計
2	5	5	13	2	2	1	3	6	39%
5.1	12.8	12.8	33.4	5.1	5.1	2.6	7.7	15.4	100

その他の内訳は、その頃（10年以上前：筆者注）はブロック流行時代でしたから、庭木を移植したまで、交通事故防止のため（鉄筋入りブロック：筆者注）が各1件であった。

表10 今の囲いを気に入っているか

	は い	いいえ	どちらでもない	不 明	計
小立野	28	14	3	8	53
	52.8	26.4	5.7	15.1	100%
小将町	17	5	2	8	32
	53	16	6	25	100%

「どちらでもない」に分類したのは、「普通」と答えた一件と、長所短所の面方を上げた一例他がある。「はい」には「まずまず」「可」が入っている。「否」の場合の理由は、ブロック塀の場合、「冷たい感じがする」「耐震上の心配」が多く、生垣では「手入れが面倒」「費用がかかる」であった。

### 質問5. 今冬雪害はあったか？

56豪雪と騒がれた今冬であったが、170枚のアンケート中、有額回答で被害を訴えた例は11件と少なかった。その中で最高は30万円で1件あり20万円が1件あった。あとは10万円の3件が目立つ程度である。ただ、樹木の被害を訴えた例は、費用はかけていないがかなりあった。

アンケート調査区域外では、フェンス等の破損を随分眼にしたが、今回調査の両町は昔ながらの住宅地であり、雪への耐性は強かったと見ることができよう。石川県下全域の調査でも、白峰村など古くから豪雪で知られた地域の方が雪害は少なかった事が報告されている。

表11 敷地面積と建坪 小立野4丁目

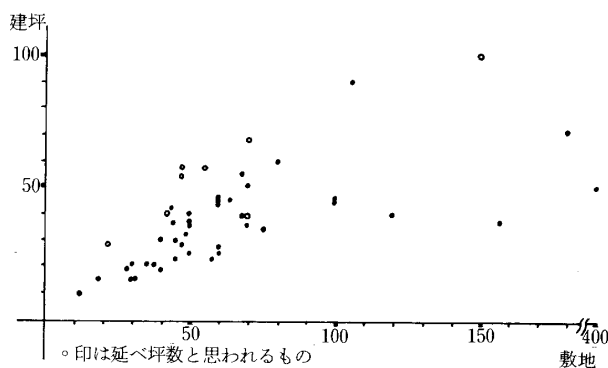
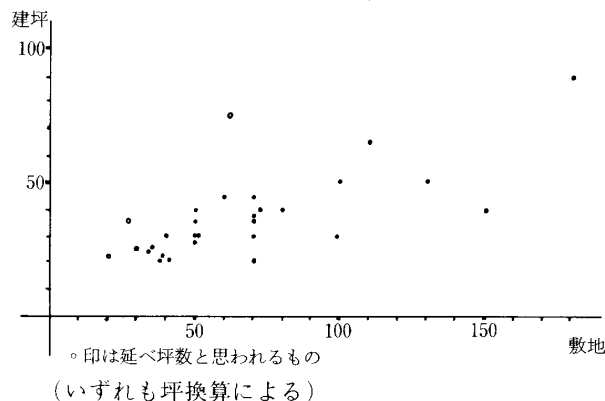


表12 敷地面積と建坪 小将町



質問8. 今後の計画その他(略)

質問9. 職業(略)

質問10. 年齢(略)

### 3-3 東京との比較

以上の結果をさらに東京の近郊住宅地と比較して見よう。調査時期と回収率は若干異なるが調査方法はほぼ同様の、ハガキによるアンケートであり、大まかな比較は可能と思われる。なおこの調査は武蔵野美術大学の学生が卒論<sup>\*4</sup>の

ための研究として実施したものである。

表13 東京(戦前の住宅地)と金沢(小將町)の比較

	東京	金沢
ブロック塀	19	35
石 塀	14	9
モルタル塀	—	13
生 垣	50	9
フェンス	7	6
ブロック、石 +フェンス	7	—
板 塀	—	8
不 明	3	3
計	100%	100%

表14 東京(戦後の住宅地)と金沢(小立野)

	東京	金沢
ブロック塀	11	37.3
石 塀	10	15.7
モルタル塀	—	19.6
生 垣	11	19.6
フェンス	29	7.8
ブロック、石 +フェンス	29	—
不 明	10	—
計	100%	100%

表15 全東京と全金沢(調査地の)

	東京	金沢
ブロック塀	15	36
石 塀	12	13
モルタル塀	—	17
生 垣	28	16
フェンス	19	7
ブロック、石 +フェンス	19	—
板 塀	—	10
不 明	7	1
計	100%	100%

数少ない資料を使った乱暴な比較ではあるが彼我の傾向の異なりは明確に表われているといえよう。

### 3-4 考 察

さてアンケート結果の分析であるが、質問④の「気に入っているか」に対して、小立野54%小將町53%と過半数が、まあまあを含めyesの答を寄せている点は、前章で述べたとおりyesの人の方が(つまり気に入っている塀の家主)多く回答を寄せた事が大きく響いているのは明らかながら、ブロック塀の家主からの回答もまた小將町地区ではアンケートの数値の方が高いのである。そしてこのブロック塀の家主は、そ

の過半数が「気に入っている」回答を寄せている事実注目する必要があるだろう。この点は当研究者の事前の予想とは大きくはずれた点であり、東京などの太平洋岸都市とも異なる点でもあり興味深い。この点は今後の研究を進めて行く上でも大きな手掛りとなると思われるので、今後さらに調査分析を要する事となる。

現時点での今一つの目立つ点は、石塀所有者の回答が非常に高い事である。(52%)この点は耐久性に富むことと共に、コスト的にも高級であり、金沢市民の風土および歴史が醸成した好み、価値感の問題がからんでいる事は大いに予想がつくブロックを生垣にしない事の理由の中には防音という問題もあった。又、茶の湯の盛んな金沢の街では、ブロックの内側に土を盛茶の湯のり上げ、茶室や、座敷から眺める内庭の必要もある。

このように日本家屋には一概に街路側からのみでは判断できない要素も多いのである。歴史的文化的都市ならばなおのこと、このような事情は多いと考えねばなるまい。擬石の流行もこのように考えてくると故なしとしないのである。

#### 4. まとめ

冒頭で述べたように、街並は急速に固有の美しさを失って来ているとの認識で、この研究はスタートしている。

大量生産と大量消費、つまり誰れもが一定水準以上の性能を有する品物を、手軽に入手する事のできる現在の工業化社会を、全く否定し去る事は無論できないが、経済と資本の論理は、時として必要以上のものを氾濫させがちである事もまた認められてよからう。今日そうした傾向は家庭内の諸道具類に限らず、街路空間にまで進出し始めているのである。かくて外壁面や窓および窓枠に工業生産品を使用するのは、もはやプレファブ建築のみの特性ではなく、あらゆる建造物の一般的な傾向となってしまった。そして、それにあき足らず塀などの外構にまでその範囲を広げつつあるのである。

ここで、前章のデーターのうち東京に関する統計の提供者である武蔵野美大生(当時)矢野智子さんの卒業論文の一節を引用して見よう。

『…戦前までの日本の住宅の囲みは、たいて

い生垣か板塀であった。しかし、その後、大量生産方式による工業規格品の時代になり、ブロック塀から、今や鉄フェンスの最盛期と移り変ってきた。近郊住宅地を見ても、少しまえのところだと、生垣、大谷石、ブロック塀などが多いが、ここ10年位の間に分譲されたところは、圧倒的にフェンスが多い。私の住んでいるところも、その例にもれていない。こんなに短い期間に、町の雰囲気、がらっと変わるような囲みの変化が起きているのである。

戦前の生垣から、戦後の工業規格による囲みの開発は、本当に正しい(私達のための)方向として、変ってきたものなのだろうか。……』

ここに読みとれる工業規格品への疑問が、彼女をして卒論のテーマ『日本の囲み』を選ばせたのであった。

なお興味深いことは、先のデーターとともに工業規格品の中でも、圧倒的に鉄フェンスの多い事が指適されていることである。金沢の場合大通り、それも比較的新らしい道路沿いでのみ25%を数えるにすぎず、他は数%以下であり、明らかな地域による異なりといえよう。金沢地域が流行遅れであって、今後次第に東京の値に近づこうとするのか、あるいは風土のなせるヴァリエティーとして独自の進展を見せるのかは、今少し継続した調査が必要であらう。

ただ、東京の場合においても、戦前の分譲地のように、一定の理想を描き、守ってきた地域と全く戦後になってできた新興住宅地とは、数値に開きの見られるところから、金沢のように歴史的遺構の多く残存する都市では、たとえ新興住宅地であっても、何らかの心理的影響は残ると考える方が妥当であらう。

以下に金沢市内に残存する築地塀(金沢の場合は武家屋敷に付随した『土塀』の方がなじみがあるが)について若干記しておこう。

田中喜男氏(金沢経済大学教授)の研究<sup>\*5</sup>によれば、土塀は昭和48年現在で172点存在している。

金沢は周知のように100万石の大大名前田氏の城下町であった。そして徳川300年の平和な治政下で俗に言われる加賀百万石文化を形成したのである。今に残る伝統工芸品の質と量は、

工芸王国石川の異名を取るほどの隆盛であるが、これらのほとんどは江戸初期からの、藩主による奨励策によるものであった。従って加賀の文化は町人文化ではなく、武家文化であったといえよう。町人こそって、名字帯刀を許される家柄町人や、細工所で働く特権職人にあこがれ、武家風の教養、作法、住まい方を真似たがったことは充分想像がつく。表15は町別の土塀数である。なおこの統計には寺院の土塀と藩政期の工法の系譜を引いていない一般民家の土塀は除外してある。当研究者の調査結果と若干数値の異なるのは主にこのためである。

表16 金沢市内町別 土塀数

町 名	数	町 名	数	町 名	数
本多町 2丁目	4	長土塀 1丁目	8	東兼六町	2
3丁目	11	2丁目	4	扇町	6
下本多町	3	芳斉町 1丁目	3	曉町	2
茨木町	4	彦三町 1丁目	3	横山町	4
油車町	3	尾山町	3	材木町	2
里見町	7	尾張町	1	石引 2丁目	1
広坂 1丁目	11	西町	1	3丁目	3
片町 1丁目	2	大手町	6	寺町 5丁目	1
香林坊 2丁目	3	丸の内	1	水溜町	16
高岡町	2	橋場町	4	十三間町	
1丁目	14	東山 1丁目	11	杉浦町	
長町 2丁目	10	兼六元町	9	湯涌町江戸村	3
3丁目	1	小將町	3		

(田中喜男氏の研究より)

参考のため、藩政期における武士の屋敷地の緑高による面積の一覧表を表16に掲げておく。

緑高では最低の60石取り<sup>\*6</sup>で120坪であったことが判る。今回の調査によって判明した現代の住宅地のうち、これを越える例はほんの一握りでしかなかったことは、別な意味で大いに考えさせられることと言わねばなるまい。

表17 加賀藩土屋敷地広さ一覧

緑高・俵米(石)	屋敷地(坪)
8,000～7,000	1,400
6,000～5,000	1,200
4,000～1,901	900
2,900～2,600	800
2,500～2,000	750
1,900～1,500	600
1,400～1,100	550
1,000～800	500
700～500	400
400～300	300
200	200
100	170
90～60	120
切米100俵	

(田中喜男氏の研究より)

## 5. おわりに

金沢大学で数年教鞭を取り、先年帰国した米人J. ケンプ氏は金沢のあるサークル誌<sup>\*7</sup>に寄せた手紙の中で、米国人は日本人のように住宅のまわりに塀をめぐらさず、ポーチや庭先に坐るのが好きで、そこから通りを眺め、また眺められている。と書いているし、我が西山卯三氏はその著書中に、京都の自宅(官舎)では、縁先に椅子を置き、生垣からチラチラ見えがくれする通行人を見るのが好きだった。と書いている。これらの情景は、もっと積極的に敷衍すれば、あのパリのカフェテラスの楽しみへと連らなるのであろう。そこでは、人々は専ら通行人との間で相互に見られ、見ることを楽しみ、同席者とは時にそれをも話題に取り込み、何時果てるとも知れないおしゃべりを楽しむのである。

ところで、フェンスの施工率が高くなり、ブロック塀や石塀にも部分的にフェンスをはめ込むことが増えつつあるが、そうした塀の形式を採用することによって、通りと庭は勿論、住宅内との関係は大きく変化することを、もっと切実に認識しておく必要がある。先ほどの例で、西山卯三氏の場合は生垣からチラチラ見えがくれするのを楽しんだ、という点に実は重大な意味があると思われるからで、日本の住宅はもともと外からながめられる事を前提としたデザインにはなっていないのである。

通りから見えるようにしたために、庭なりテラスなりをそれまでよりも使い難いものにしてしまった、との経験を持つ人は案外多いのではあるまいか。当研究者自身、しゃれたフェンスの洋風庭園を何件も写真に記録したが、庭園でのバベキューパーティーはおろか、屋内の家人の顔さえも見たためしがないのである。ほぼ全ての家は、おそらくは街路からの視線をさえぎるために、上元気の日中であってもカーテンを引いているのである。

第1報の内容を昭和55年のデザイン学会で発表した後、筑波大学の平助教授から頂いた論文<sup>\*9</sup>は、正にこの点に言及したものであった。即ち積極果敢に塀なしの街づくりを進めた、筑波研究学園都市の並木地区官舎街や、水戸市双葉台団地の場合、夏季においてもカーテンを引いて

暮らさねばならないのが実情であるというケースについてである。この論文の結論には次のように述べられている。「半公的な外構<sup>\*10</sup>を日本の住宅地内に確保するためには、1戸建住宅を建てるにふさわしい敷地を確保した人でなければ、建築許可を得られないという法規的な手段が必要である。

次に開放的な外構部を得るために、視覚的なプライバシーを保つ処理が必要である。これは住宅自体の問題を解決しただけではだめで、屋内の住まい方自身、それに対応する家具や照明にいたるまで一連の問題として意識されるべきであり、塀が消えるということは屋内のデザインまで変革しなければ対応出来ないのである。……（以下略）」

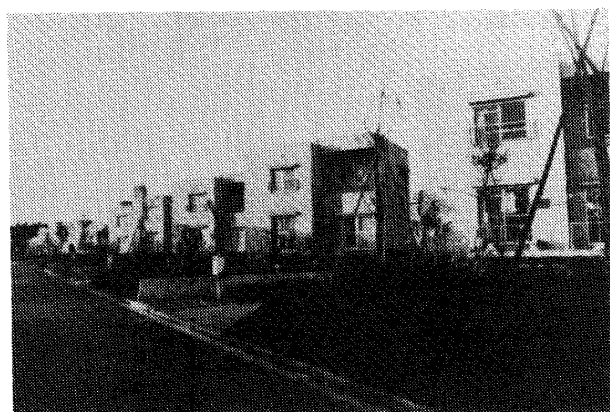


写真1 築波研究学園都市 並木地区

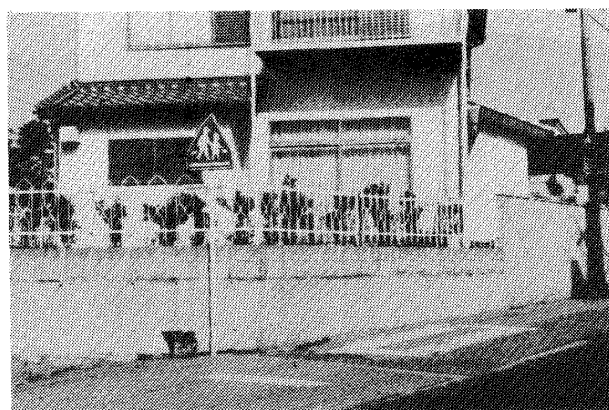


写真2 金沢市内の住宅

金沢は写真3に見るように、樹木類には冬の雪霜害に対してかなりの防護策が必要である。時にそれは風物詩として通行人の眼を楽しませもする。しかしその経費たるや大変なものであるし、そこまでしても雪害は防ぎ切れてはい

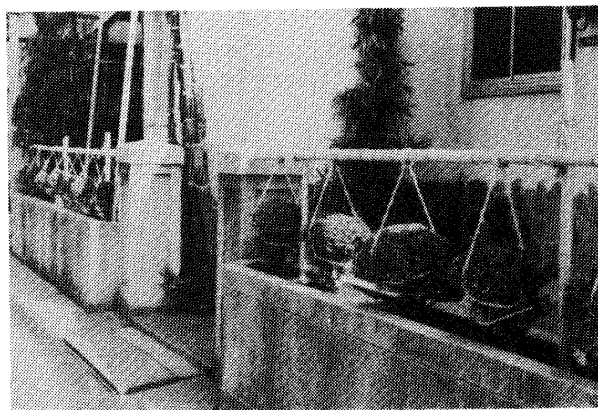


写真3 花壇式生垣の雪つき（金沢市内）

ないのが実情である。しかし景観上生垣に優る塀は極めて少ないだろうというのが、今日まで進めて来た研究の結論である。視線をさえぎるが通風は良いというフェンス（木柵）を自ら設計し自邸に設置した例が、アンケートには東京で1件、金沢で1件あった。こうした工夫のアイディアは当研究者自身既にいくつか持っているが次報においてそれらを提示したいと考えている。最後に、金沢市は今年市内三つの小学校でブロック塀などを生垣に切り換えた事を報告しておかねばならない。昭和54年に本研究の端緒について以来、ブロック塀を何とかしたいと考え続けて来た当研究者にとって、当局の英断には拍手を送りたいが、維持管理には困難な事態の発生も予想されるので、雪害防御など、維持のためのデザインも今後は研究課題として取り上げて行きたいと考えている。

注1．小立野二丁目、石引四丁目、長町一丁目、同二丁目、同三丁目、泉野二丁目。

注2．付図1参照のこと。

注3．下鴨萩ヶ垣内町、南禅寺下河原町。

注4．題名「日本の囲み」長谷川堯教授に提出（昭和52年度）

なお、調査日は昭和52年11月。調査地のうち戦前の住宅地とは田園調布、成城学園、大泉学園、国立。戦後の住宅地とは新所沢、所沢。アンケートの配布枚数はそれぞれ150枚。回収率は戦前地で58件（39％）戦後地で72件（48％）。

注5．「侍屋敷土塀の系譜と現況一金沢市内における一（昭和48年、金沢市教育委員会）

注6．与力、平士の最低禄高。

注7．「金沢を世界へひらく市民の会」会報（1979年11

月号)

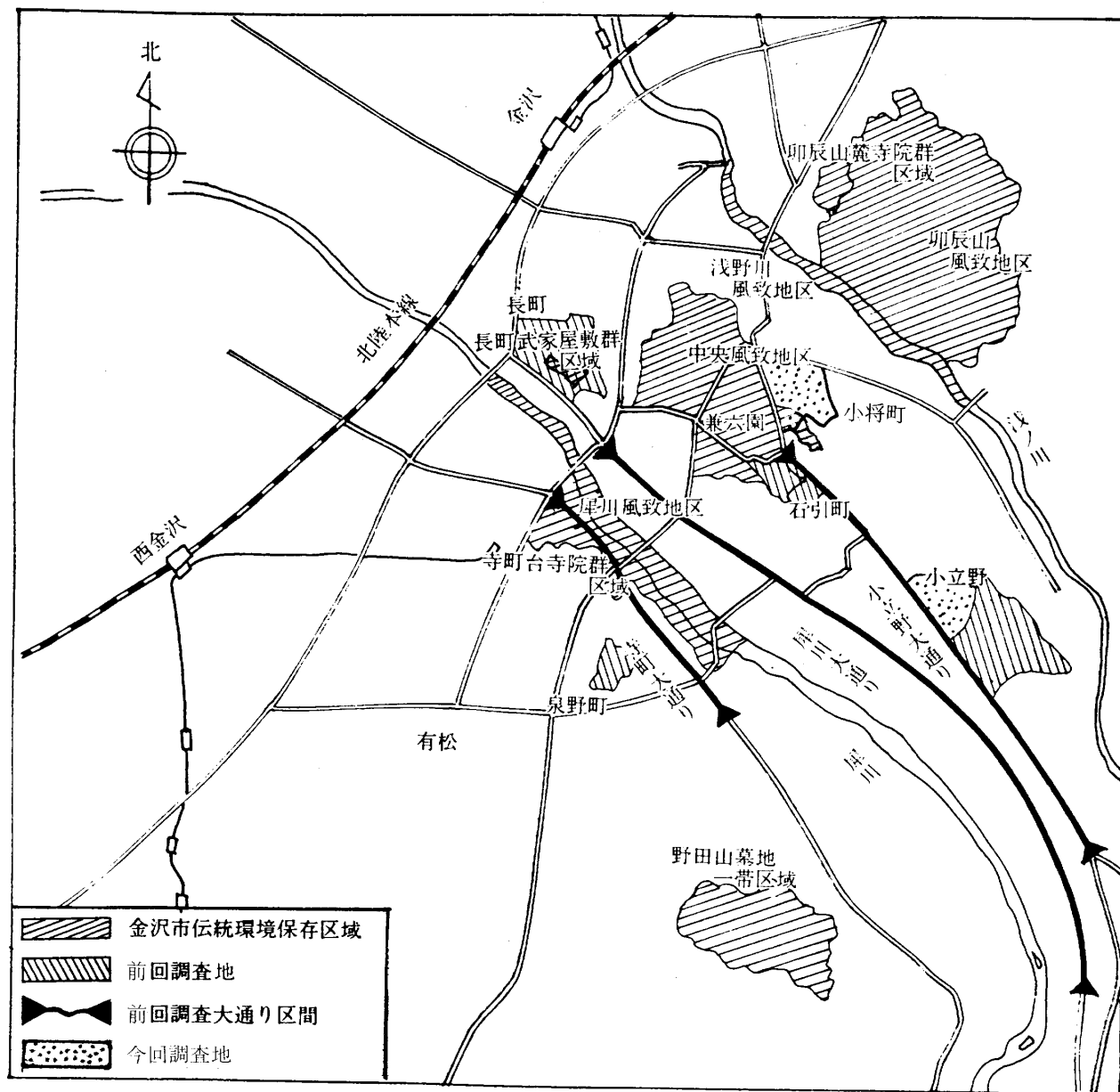
注8. 「住み方の記」筑摩書房(昭和53年)

注9. 「日本の一戸建住宅地における半公的空間についての考察」(1980年, 筑波大学, 芸術研究報1)

注10. 建築用語。建物本体ではなく, その外側に設けられる庭, 塀などの構築物。

付表 金沢市長町2丁目(昭54年9月調べ)

ブロック塀	36	ブロック+生垣2	(件)	38	36.2
石 塀	8			8	7.6
モルタル塀 (含R.C)	17			17	16.2
生 垣	6	花壇式		6	5.7
フェンス	6	フェンス+生垣1		7	6.7
板 塀	10			10	9.5
竹 垣	3			3	2.9
築地塀	10			10	9.5
その他	6	(トタン5、石膏ボード1)		6	5.7
計				105	100%



付図 金沢市内略図